

《ロンドンからのたより(両親宛)》・1977

～【タヴィストック】無我夢中～



1977年1月1日

お父さま&お母さまへ

謹賀新年、あけましておめでとうございます！今日は、日本で言えば元旦ですので、ご近所のシモヤマさん宅にお招きいただき、一緒に新年を祝いました。珍しい仙台風のお雑煮は勿論、奥さんご自慢のお正月料理の品々が台所から次々と運び込まれ、久々の豪華な日本食に舌鼓！あちらは‘作る人’、私は専ら‘食べる人’というわけ。子どもらは私になついてくれるから、彼らを恰好の遊び相手にして、私はすっかり‘おばちゃん’気分！家族団欒に浸り切って、それは嬉しいひとときでした！

ついでに、ここしばらくそちらからの音信が途絶えてましたから、ちょっと気掛かりで電話を拝借したの。だけど、国際電話のラインは全て混んでいて、結局無駄骨に…。声がとても聞きたかったから、ちょっぴり気持ちがあがっかりしてる。お父さま、そしてお母さまを案じる思いはやはりいつも心から離れません。そのうちたよりが来るものといつも毎日心待ちにしております。

お父さまの録音してくれた音楽のテープ、琴の曲に童謡やら歌謡曲やらと、この頃喜んで掛けてしよっちゅう聴いております。此地での今年のクリスマスは不況の煽りでしょうか、全体に盛り上がり欠け、沈滞ムードでなんととも暗い静かなものでした。暖炉の上にはずらっと飾ってあったクリスマス・カードはもうさっさと片付けて、お正月らしい絵などを掲げたりして、自分の部屋だけでもとお正月の華やかな雰囲気演出しては日本を懐かしんでいるところなのです。

例の錦鯉の取り持つご縁でお付き合いのある Mr.&Mrs.アレン夫妻ですが、相変わらずちよくちよくお声を掛けていただきます。彼らの一人娘のリンダさんがここロンドン中央にお住まいなの。クリスマス休暇にはご夫婦揃って娘さん宅でお過ごしなのが恒例とやらでピーターバローからわざわざお越しなもので、私にもぜひどうぞってお茶に招かれたのよ。それで先日久し振りに彼らに会って来ました。勿論話題は錦鯉のことになっちゃうんだけど、愉しかったのよ。お二人ともこちらの【英国錦鯉協会】の責任ある地位から既に退かれたわけだけど。そりゃ根っからの‘鯉キチ’でいらっしゃるから、日本の‘鯉キチ’たちとの交流をとっても嬉しく思っておいでのご様子よ。Mr.アレンは、日本へのビジネス旅行の折など暇を見つけてはあちこち錦鯉の養殖池などを訪ねてこられるみたい。今回その折りに撮った写真を見せてもらったわよ。それから、あられの缶入りセット1箱をクリスマス・プレゼントにいただきました。海苔の付いている極上等なあられなの。でも海苔って彼らにはちょっと苦手で、たぶん日本でどなたからかおみやげ物としていただいたのを私に下さったのだと思うけど。私は大喜びでした。何がどうで話しが弾むというわけでもないけど、とにかく錦鯉が取り持つご縁だけあって気持ちの良い種類の人たちと申せましょう。彼らを引き継いで会長職に就かれたシールさんは、昨秋《愛鱗会》の行事参加のため日本にお出掛けだったらしいのね。アレンさんからお話を伺うだけですけれど。着実に錦鯉の取り持つご縁が日英両国間で広がっているのは確かみたいです。それに、《愛鱗会》の季刊誌『鱗光』が英字出版されるんだとか。悦ばしいことね。こうした予想外の進展もそもそもが舞鶴のご両親のお蔭だって Mr.&Mrs.アレン夫妻はいつも私に感謝を口にされます。なんだかとっても面映ゆいわね。

ドクター・カーベルが明日のお昼、食事にお招きくださいました。庭付き一戸建てに移り住まれておいでなのです。お父さまを郷里のスコットランドから呼び寄せられて一緒に暮らすことに、つまり老後の面倒を彼女が見ることになったということらしいのよ。そのご新居には今回初めて訪ねて参ります。かなり前、お招きがあった折には私の方の仕事がえらく立て込んでいたものですから已む無くもお断りしたのだから…。例の一時帰省の際に日本からおみやげに持ってきた博多人形を差し上げる機会がなくてそのままでしたから、明日持参してまいります。4年余りの長い付き合いです。一年に2、3回会うだけです。こちらでの就職の折には身元保証人になってもらい、推薦状を書いてくださるやら随分とお世話になってますしね。いろいろと英国流のお暮らしぶりなど、実に学ぶところの多い方なのです。お会いするのが楽しみです。

仕事の方はとても順調です。つい先日セント・ジョージ病院の直属の上司ジョン・ブレンナー氏から、この1年間の私のめざましい進歩について、おめでとう！ってねぎらっていただき、わざわざ菊の鉢植えをお祝いに贈られました。こんなふうにも認めてもらうことは悪い気が致しません。この夏、日本に帰って、将来についての確かな青写真を持ったことだし、あとは唯実力を付けて、また人間としても指導者としての賢い明るさなど身に付けていかなくてはと思っています。日本から時折たよりを頂戴しますと、今から先生格の扱いなのにはこっちが恥ずかしい思いを致しますけど。そういう期待があちらにあるとしたら、当然ながらいっそう私としても仕事への真剣さを増さざるを得ません。お父さまにはその昔、‘投資’をお願いして、そのうちバッチリ利子を付けて返しますからだのと大見得切ったわけだけど、

お金のことはどうであれ、実際にはどうなることやらまるで見当も付かなかった4年前に比べれば、えらい運の開かれようだと、それだけでも誇っていいことです。なんと云っても有り難いことです。

お正月休み、どうぞゆっくりしてお過ごし下さい。お二人ともくれぐれも体に気を付けて。どうぞ仲良く、この一年、宜しくお願い致します。ではお手紙待っておりますね。

いずれ又。かしこ 千鶴子より



1977年1月9日

お父さま&お母さまへ

ようやく久し振りのたよりを頂戴しました。こちら郵便局が休み続きだったせいか、何と10日以上も日数を掛けて届いています。お金の方も£225ポンド、本日確かに頂戴しました。いつもなにやかやとほんとに相済みません。

ところで先日掛けた国際電話なんですけど、‘直接ダイヤル式’だったのよ。交換手を介さないだけ随分日本が近くに感じられました。ちょうどお昼頃が日本では夜の9時～10時になるらしいし。就寝前だから、お父さまもお母さまも朝と違ってまだしゃきつしているみたいで、話しもたくさん出来ましたから、私は大満足でした。実はちょっと冒険したわけなの。病院の私の部屋から掛けたのです！‘直接ダイヤル式’だと、料金も格安になるようすし。それぐらいは病院に日頃奉仕しているわけだから、大丈夫です！

さて、既にお話ししてありましたように、ドクター・カーベルの新居をお訪ねしてきたのです。とても閑静な住宅地にあつて、二階建てで部屋の間取りもゆったりしており、裏庭も明るく

広々として、とっても理想的なお住まいでした。88歳におなりのお父さまをスコットランドから迎えられて、二階の眺めのいい寝室をトイレ付に改修され、随分と居心地のいいお部屋を準備されておいででした。ご自分用の寝室の他に、趣味で彫金をなさっておいでだから、それ専用の仕事部屋もあったりなの。あちこち家の中をご案内いただいたのだけど、ほんとに感心した。生活に余裕があるということの素晴らしさを見せ付けられたということでもあります。独身女性であっても、麻酔医という身分は別格だとしても、ここ迄やれるということは大きな励みです。やはり女でも自立し、‘力’を持たなくてはと改めて鼓舞される思いでした。どういふご家庭の事情かは勿論伺うことではないわけだけれど、ドクター・カーベルがお父さまの老後のお世話をすることに決められて、ここ迄出来たというのも、彼女の経済力があっての話なわけだから。凄い、羨ましいって正直思ったのよ。私などどんなにか親に恩義があっても、将来果たしてどうそれに報いることができるものやらと些か心もとないわけで。。

ドクター・カーベルご自慢のロースト・ビーフやら心尽くしの手料理をいただいた後、お庭が眺められる居間の暖炉の前のソファに座り、窓の硝子越しにベランダに飛来する野鳥たちが餌のナッツ類をついばむ様子に見惚れながら、くつろいでコーヒーを飲みながら一緒にお喋りしてたのね。お父さまは、お人柄が全然難しくない、穏やかな方で、ユーモアももありなの。今は気候が寒かったり、ぐずついていますから、概して家の中に居ることが多いようなのですが、春になれば庭で花やら樹木の世話に忙しくなさるはず。庭の隅に野菜畑も作ったりで、結構いい収穫があるらしくって、そんなこんなでとってもお元気そうなの。お隣り近所とも垣根越しの付き合いが延長して、

お互いに招いたり招かれたりの茶飲み友だちも出来たり、教会関係で知り合いも増えたりだから、なかなかご高齢とは思えないほど、新しい土地によく適応しておられます。それも娘であるドクター・カーベルの甲斐性のお蔭というわけだから、改めて彼女を親孝行でご立派と思ったのよ。

そんなこんなで刺戟されて、私も自分の両親の老後のことをあれこれ思ってみたり、それよりもまずは自分自身の帰国後のことよね。なかなか考えさせられた次第です。私自身、何をどうすると言っても、まずは経済力を付けないことにはと思いました。日本へ帰っても、就職して落ち着くまでは、当分の間は親の厄介になるのはどうも避けられないみたいですし。本を出版しようかしらとか、あれこれ金を稼ぐことをも考えるけど、私たちのやっているような仕事を商売にして流行らせると邪道に陥りやすいし、そっちも気を付けなきゃいけないし、経済的に余裕が出来るのは35歳ぐらいかな。今出来るものなら、<親の面倒は私が見ます！>とか、<大丈夫、私に任せて！>とか大見得を切りたいところですが、実際にはまだまだでして、後何年かはご辛抱いただくことになりそう。。

ちょっと嬉しい話が一つあるの。ミスター・ブレンナーがおっしゃってたけど。元旦の日に、【タヴィストック】のいわゆる O.B.(同窓生)とでも言うのか、セラピスト・コースの卒業生やら教官の方々の新年会があったんですって。その折、彼のもとにたくさんの方がわざわざ私のことを言いに来て、私を褒めたのですって！それで彼に<Congratulation(おめでとう)！>って言ったんだとか。彼がチズコを‘手塩に掛けて’育てているということが【タヴィ】の内輪の皆さん方にはどうやら知れ渡っているみたいなの。それでちょっと

彼も鼻を高くしたようなのよ！私のことをご自慢の‘愛弟子’だって思っておいでだからね。これって、いいお話しでしょ！？日本に居たとしても、実力が発揮され人に認められてゆくためには相応の時間が掛かることは道理でしょう。此の異国の地でこのレベルに達せられたわけだからやれやれと言えるわね。さまざまな困難があっても、これから尚、我が道をしっかり歩いてゆけると思っております。

いつか将来、専門書を著すことも責任の一つと考えますし、今出来る限りの参考資料をがっちり集めております。そうした将来のことってかく茫々とした感があり、時間を掛けないと形にしてゆけないとは解っているのですが、時には気持ちが焦るとどんどん自分を追い詰めてしまう。時には何をほったらかしてでも日本へ帰りたくて涙することがあったりなのです。気持ちを挫かすことのないようにと絶えず自らを戒めております。お天気が温暖になったら、金魚を飼おうかしらなんて思ったり・・・でも我が家の池の錦鯉の代わりには全然及ばないわね。では、お二人仲良く、どうぞお元気でいらしてください。

ではご機嫌よう。 千鶴子より



1977年1月19日

お父さま&お母さまへ

そちらの気候は如何ですか？こちらは多少なり穏やかな気配がしてます。街路樹が裸んぼで、枝々が黒々としている。でもなかなかよく見れば、その風情に趣があって面白いものです。丸い黒っぽい木の実が冬でも落ちずにそのまま枝にぶらさがっていたりするのよ！北海道で見た、例のなんだっけ？‘花餅’だったかしら？お正月に吊るすやつね。ピンクやら白の色つきの

お餅で出来たボンボリのようなのを小枝に付けて飾るのを思い出しては可笑しがっています。そもその宗教的意味合いはまるで忘れていて、ただその形象のみが記憶に残っているわけだけど。それでも思い出せば、懐かしさが湧いてきます。豊作とか幸運を祈願するものだと思うけど・・・幼児期の頃に見聞きしたいろいろな記憶の断片が折々に頭を過ぎる。その度に、結構自分は幸せだったと、なにやらほっこりとした気分になれる。質朴というか純情というか・・・(!)。

それとも関連する話なのですけれども。去年の夏の一時帰省の際に東京でお会いした精神科医で、『武田病院』の院長の武田専先生って方が私にわざわざ手紙を書いて寄こして下さったの。私があちらで皆さんにとっても受けが良かったっておっしゃってね。それというのも、私が秋田生まれだから、東北の血筋というか、それに舞鶴で育ってるから北陸の純朴さみたいなのが由縁しているようだとおっしゃるのよ！それぞれの土地が生み出すところの気質ってのは確かにあるでしょうね。私はその点、やっぱり最終的に東京に落ち着くのはさてどうしたものやら、もう一つ肌が合わないのじゃないかとちょっと億劫がるところあるわ。ここロンドンで4年間も都会暮らししているのにねえ。やっぱり田舎が好きよね。

本音を言えば、猛烈に日本へ帰りたくて、一日も早く！こちらでの経験は貴重だけど。日本語を使えないのがもう一つ寂しくて、残念なのです。仕事も大事ですし、慎重に将来のことも覚悟して今勉強しておかなきゃいけないのも解ってはいるんだけど。それからもう一つ、ゆっくりと両親との語らいが欲しいの。ごく普通の家庭的情愛に欠けている今の生活がちょっと恨めしい。将来そっちの方面で充分楽しめる

いいなと期待してる。でも、そんな人間らしい暮らしの余裕がいつか果たして本当に持てるのかしらって、まるで心もとないの。

こちらの仕事の状況は実際のところ‘戦場’みたいなのです。考え方・見方が違うということは人間を疎遠にするものです。何のことで何故に争っているのやら、真実、本当のことなぞ全然解からないままに・・・可笑しいことです。随分と消耗してしまいます。一人でいることは良し悪しです。誰も風当たりの悪い時は避難するところが欲しいものですしね。そんなこといろいろ考えたりすると、いっそう日本があったかく恋しく思えるのです。でも将来いつの日か、この今を振り返って、まあそう悪くもなかったと思う時があるんでしょね。折々に眼を瞑って我慢することもあります。どこに居てもそうでしょうが、やはり異国ですからそうした折は‘よそ者意識’を募らせて辛くなります。もし救いがあるとしたら、それは一つ、【タヴィ】の身内で《Tavistock・Family (タヴィストック家族)》ということをよく言うんだけど、確かに【タヴィストック】に帰属しているお蔭で、結構私なぞは庇護されている身分なわけ。しかしながら、まだまだ自分の立ち位置が確固たるものではないことを折々に思い知らされる。所詮‘半人前’だって・・・それも致し方なしよね。

小此木啓吾先生からイスラエルでの『国際精神分析学会』にお越しの折ロンドンに立ち寄り、私にも会いたいと連絡がありました。そうした個人的な交流も大事だけど。実際のところ、学問上どんな貢献が将来自分に期待されているのやらさっぱり展望が見えない。【精神分析】のなかでも「クライン派」は独特のもので、その臨床の現場を体験せずして、ただ「クライン派」の著作を翻訳・出版して摂取したつもり

になることには私としては違和感を覚えるわけ。どこか我国の【精神分析】を一刻も早く欧米並みの水準にせねばと躍起になってる。小此木先生のお立場がそうだとすると、それはそれで結構。でも勇み足で空回りしたりなぞ私は御免なの。そもそも人に煽られて動くような自分だとは思えないし。どちらかというと気質的には、大将になって皆を引っ張ってゆくというより、のんびり我が道を一人歩むのが性に合ってるのかも・・・。

いずれ此地で手掛けた臨床症例の記録を帰国後にじっくり纏めて出版できたいとは考えてはいるんですけど。随分先のことになりましょうが、でもそう遠くもないような気持ちでもいるのです。しかしながら実際のところ、私の頭の中は英語やら日本語やらがチャンポンというか。帰国後、此地で英語で経験した臨床の実態をいざ日本語で語るとなれば酷く心もとない・・・ほんと、そんなものなのよ。

本出祐之先生に伺ったお話なんだけど。イギリスでの福祉行政の査察をひとまず終えて日本で帰朝講演とやらをおやりだったらしいの。そしたら聴衆は、先生の話があまりにも英語の語彙が多すぎてさっぱりチンプンカンプン、話の半分も要領得ずということだったみたい。どっちにとってもお生憎さまだよね。笑うに笑えない。とかくそんなものです。とにかく自分が見たものを他者にも同じように見てもらえるとしたら、つまり「分かる」を共有する為にはその前提として‘場’を共有することが必須でしょうから。私としてはまずは私自身の‘臨床の場’を確保したいわけです。凡てはそれから・・・。そうした私の意向は小此木先生には既にお伝えしております。さてさて、どうなりますやら。では機嫌よう。 千鶴子より

.....



1977年2月19日

お父さま&お母さまへ

おたより有難う。私の方も随分と何だかんだとこちらの忙しさに追われてご無沙汰致しました。まだまだそちらは寒いのですね。こちらは春めいた気配が幾分か出てきましたよ。あちこちの庭には例年の如く、クロッカスやら水仙が蕾をふくらませて来ましたし。それでも時折寒波らしきものがあるのです。冷たい雨の土砂降りにはなんと云っても気を減入らせませす。幸いなことに風邪も引かず、仕事は順調に続けております。毎日毎日何やかやと‘事件’が起こります。そういうときは困った、困ったと頭抱えているわけでは毛頭なく、<Leave it to me! [私に任せて!]>ってな調子で、それってこちらの流儀だけど、対応しておりますわけだから、日本に帰ったら、一つひとつそうした経験が活かされて、ジタバタせずに済むものと思っただけで耐え、かつ奮闘しております！

こういう類いの学問は年月の掛かることは必至なのでしょう。やっと4年目を迎えて、確実にモノになっているのを見て、我ながら嬉しい限りです。両親からの長年に亘る精神的経済的援助に加えて、こちらでは私がセラピストとして大きく成長することに一生懸命にご尽力くださる人々のいることを考え、なかなか簡単には事を放り出せないという心境になっています。考えてみれば、日本人でこれだけの年月に亘って、これだけの内容のあるプロフェッショナル・トレーニングを受けた人はかつて無いわけですから、そういう自負心と責任をじっくり思ってみるのです。これも偏に両親が惜しみない支援をくださればこそと感謝しています。

先日 ￡300ポンドの送金、頂戴しました。【タヴィ】の今期授業料 ￡190ポンドもお蔭

さまで納めることが出来ましたし。我ながら、よくまあ、これだけの金を使って、なんと調子のいいことと呆れたりするのです。ちょっと空恐ろしい・・・！けれど、よくよく考えてみると、ここ迄無事来れたのも、つまりは親に甘えてきたからであって、もしも此地で無理して何年か資金づくりを理由にあれこれ他の雑事にかまけていたら、おそらくこの道は途中で断念するのが落ちだったと私は考えるのです。実は、たまたま本出先生を介しての知り合いにそういう若い日本女性が一人おられます。既に3年以上こちらに滞在していて、将来はこちらの大學で社会学を専攻したいという希望なの。英語学校に通いながら、資金稼ぎというわけで日本人の出版通信会社にモグリで入っていて、どうしてもそれ以上は越えられないので今や彼女かなり焦っています。私が彼女の立場であっても、どうも無理だという気がするのです。それでつい我が身を振り返り、尚更に親に対して恩義を思うのです。でも正直言って、私なんかよりずっと彼女は逞しいのよ。異国に住みながら、いろんな人脈を駆使しながらなんとか生き残る術を心得ている。此地で見たもの・聞いたもの・知ったものがいずれ彼女の‘社会学’になるんでしょうから、決して彼女は損してなぞいない、と私は思う。苦勞してるとか、苦勞していないとかの比較の問題ではありませんでしょうが。でもやはり自分がちよっぴりひ弱に感じさせられてしまうわけなのね。

時折彼女をお食事にお招きするんだけど。この前なんか、私に和紙の紙人形の作り方を教えてくれましたよ。例の一番簡単なやつだけ。可愛く出来上がって、二人でキャキャ愉しんだってわけなの。気分転換は必要です。時には何もかも忘れて、総て、その時の事だけというふう処理することが肝心みたいです。それ以上考えても仕方がないということもありましようからね。

ところで、お父さまが庭で雪遊びをした
んですって！昔の、ほら、《札幌の雪祭り》を思
い出すわね。お父さまなんて、その点、昔取った
杵柄じゃありませんか！陸上自衛隊のたたくさ
んの若い部下の方たちを率いて、なんと凜々しか
ったこと！懐かしいわねえ。でも雪って冷たくて、
私なんか通学の道すがらよく泣きベソをかいてた
もの。スキー遠足なんて大嫌いだったし。大雪
山の麓でスロープを橇で滑って転んでさ。でもそ
う云えば、校庭での雪合戦は勿論だけど、子ど
もら皆が力合わせて、大きなもの(兎さんとか)を
雪で作ったりしたこともあったわ。その折の賑やか
な歓声が聞えてきそう…。お母さまの編んでくれ
たピンクの毛糸の手袋に凍りついた雪がびっしり
貼り付いて、指先がジンジンかじかんでくるの。

この頃、頻りにそんな昔のことを思う。
お母さまの郷里の秋田の前郷にも一度お母さ
まと一緒に訪ねてみたいわね。ほら、民芸会と
かね、芸達者がいて、しゅちゅう太鼓叩いて民
謡を唄ったり踊ったりしてたでしょ。そういう賑やか
な雰囲気が懐かしい。前郷の里ではそんなの
人々は今まだやっているかしら…。

お母さまは、体の方、だいぶ調子がい
いようですね。良かった！更年期には誰も一
時的にバランス(生理学的な均衡)を崩すと聞
いてます。じっくり時を良く稼ぐことです。日頃の
頑張りを余り出さないで、ひたすら気楽にするこ
とです。時には、郷里に戻ったらどうかしら。秋
田弁を久しく喋ってないでしょ？温泉にでも入る
のが一番なのでしょうし、東北の温泉、いいとこ
あるんでしょ。ともかく仕事の方は‘東北の女’の
粘り強さもほどほどに、ただお父さまとは夫婦円
満にね。くれぐれもどうぞお大事に。

いずれ又。ご機嫌よう。千鶴子より



1977年3月5日

お父さま&お母さまへ

お元気そうな明るい様子のおたよりもら
って、安堵してます。お母さまも随分と気分的に
立ち直って、いつもの如くシャキッとしてきました
ねえ。本当に良かった！女の体の変調ってのは
どうしようもないもの。薬が研究されてきているの
だから、それで折々の生理的な変調を調整して
ゆくことはこれから必要不可欠です。子どもだっ
て大人だって、体の具合が悪けりゃ、気持ちが悪
くなるものですし。

シモヤマさんとこの4ヶ月になる男の子、
日頃は‘菩薩さま’のような、なんともいい笑顔
をふんだんにばら撒くような子なのに、昨晚訪ね
てみたら、多少風邪気味だとかだけど、妙に難
しい、全然ウンともスンとも反応に乏しい硬い表
情なので、私、心配しちゃったの。熱が引けば、
また笑顔に戻るでしょうけど。ただ、母親のいた
わりってのは、子どもの熱が引くのをただ待つ間
だけでも尊いものだとしみじみ思ったり…。ケイコ
さんの傍らでミッチャンの顔を覗き込みながら、い
ろんなこと思ったのよ。私なんか今でも具合の悪
い時など、昔お母さまが額に手を当ててくれたり、
氷枕を取り替えてくれたことなど、幼い頃の出来
事が浮かんできます。「医は仁術」ということが言
われるけど、まったく近頃はいたわりやら思い遣り
の交換が出来難くなってきていることは確かで、
家庭内では勿論、医療現場でも…。なんとも
生き抜き難い世の中になろうとしています。社
会全体に人間が使い捨てにされる風潮が加速
的に蔓延ってゆこうとしている。人は何が嬉しく
て生きているのやら、本当に解からなくなる。で
も時折そんなことを意識できるだけでも健康で
す。それを逆手に取ることが生き抜き秘訣です。

錦鯉をみれば憂いを忘れ、花を活ければ汚いドサドサした思いが消え、という具合でしょ。なかなか世の中、そう捨てたもんじゃないわね。私などは、北陸のあの青い海をどうしてもまた見に行きたいぞとか、吉野の桜見物には絶対行くぞといった思いがあるから、まだここで死ぬのは厭で、やっぱり頑張ろうとしますし。お父さま・お母さまはここに至って経済的にも余裕が出来たことですし。これからがまさに人生の華だと思ってどうぞ健やかに愉しく生き延びてまいりましょう。

ところで嬉しいことが一つ。当地での《成人のための大学》の講座を私が幾つか受講してるって話をしたことあったでしょ。最近のこと、事務局の人から日本に関する特集記事を企画しているとやらで、活け花について何か文章を書いてくれと頼まれて、書いたんだけど。それがすごく喜ばれたのよ。それで活け花の実例を幾つか本から抜書きしたのもぜひ載せたいからって、いつかお母さまが送ってくれた活け花の本を3冊ほど借りてゆかれましたわけ。どこで何が誰のためになるやら解りません！ほんと不思議な巡り合わせがあるものね。つまりはお母さまの花好きから事は凡て始まるわけだから・・・。実は私も、3月3日の《雛の節句》には、チューリップと黄水仙を飾りましたよ。部屋に花があるのは誠にいいものです。秋田の本家に飾られてあった古びた豪華な雛壇が思い出されました。《雛祭り》なんて、別に大した感興を催すこともなかったのに、こちらの人の目で改めてそれを見ると、やはりそれは日本の持つ凄い‘文化力’であり、誇っていいんだって俄然気づかされるわけ。改めて「日本発見！」ってやつです。そんなこと、日本を出てみて初めて解るなんて感慨深いわね。

では又。ご機嫌よう。 千鶴子より
.....



1977年3月16日

お父さま&お母さまへ

こちらは雨模様です。それでも桜やら樹木の花々が咲きほころび始め、春を迎えた気分になります。この頃、頻りに田んぼの畦でのセリ摘みやら、日本での春先の我が家の年中行事を思い起こしております。先日などはひょんなことで福島からいらした人とお話していたら、なんと「イナゴ捕り」の話ができましたよ。あれを佃煮ふうに味付けして食べたのだったかしら？そんなこんなで、いっそう露やらワラビやら筍やらと春の季節の食べ物が恋しく思われてなりません。この住まいの裏手の野原にはどうかこうにか日本情緒を思い起こさせるものがあるとは云っても、桜の木やらスカンポなどの野草の類いで、この時期露のとうやらツクシをどうしても眼が探してしまう、そんな衝動を覚えるのよ。それって私に身に付いた野草摘みを習慣とした‘日本人の血’が騒いでいる由縁かしら。DNAだとしたら、なかなかそう簡単に払拭できるはずないわね。可笑しいですね。

さて、秋田の郷里に里帰りしたお母さまのたよりいただきました。随分と気晴らしが出来た様子で、私も心から良かったと思う。お父さまもよく愚痴も言わず、お母さまを送り出したのですから、えらいです！それから、思いがけなくも本荘の伯父さんからおたより戴きましたよ。あの高齢でいらして、まったく体も気持ちも考えもしっかりしているったら、もう呆れるぐらいで実に感動しました。いろんな社会情勢もちゃんと把握し判断しておいでで・・・。偉い方よね。ご自分の生活をあれだけ計画立てかつ実行され、菊づくりやら趣味も豊富で、孫の教育にも一生懸命なんて、伯父さんは実に幸福な人と申せましょう。

私は4歳頃、一時期本荘宅に預けられ随分と大事にされたのに結局はあちらになつかず家に出戻ったという経緯があるから、子供心にも不義理したみたいで伯父さんには済まない思いが残りずうと疎遠のまままでいたけど、でもちゃんと私のこと心に掛けてくださっていて、ほんと嬉しい限りです。あのまま本荘で‘もらわれっ子’になってたらどうだったかしらねえ。また違った人生になってたでしょうね。‘違った私’になってたかも・・・！

お母さまもこしばらく秋田滞在で随分と心晴れ晴れと‘命の洗濯’をしたとのことですが、俄然ご自分を取り戻されたみたいね。気の済むまで秋田弁でお喋りもできたでしょう。本来の‘自分の居場所’なんてほんと有るのかしらと思う。結局何処ならいいのかなんて答えはありそうで無い。難しいわね。でもやっぱりお母さまはお父さまの側が一番で、今更郷里に戻りたいとは思わないでしょう。でも確かに本荘の伯父さんみたいに自分流を貫いて生きられる健康な人というのは、ただ一緒にいて、とりとめもなく話したり笑ったりするだけで救われる思いが致します。お母さまもそんなふうに分のペースで自分の暮らしを立てる日がそろそろ来たのではないかしらね。よくお母さまが言ってたけど、<独りで家に居てもねえ(つまない)・・・>って。つまりは時間を持て余す心配してるってことだろうけど。我が儘だの贅沢だのって、どこか知らず知らず自分に対して禁欲的になっていないかしら。働くことだけが生き甲斐なのが美德って案外日本人の感覚にあるかも知れないわね。その慎ましが健気ともいえるけど、自由の味を知らないというか、敢えて申せば‘苦労性’ということかも知れないわよ。

必ずしもこちらイギリスの人たちをお手本にして見倣うべきとも思わないけど。男も女も、

概して仕事するのは給料をもらう為と割り切って、週末や休暇などには大威張りで自分の趣味に没頭してる。だから退職するのは大いなる解放なわけです。自分の嗜好・趣味に重きを置いた人生を選んでゆくという姿勢はやはり成熟した社会を感じる。多少とも財産を持つ人などは、会社役員の地位などを得て軽く仕事をし、後は銀行預金の利子で生活費をまかない、大概の時間は暖炉の傍でパイプふかしながらじっくりお気に入りの本を読むとか、えらく生活がゆっくりしたペースになる模様なのよ。どうやらこうした‘ゆとり’は余剰所得のある富裕層の特権というより、むしろそのような‘文化’でもあり‘伝統’でもあるという方が正しい。つまりは考え方一つというわけ。問題は自分の人生が自分次第か、別の誰か次第かといったことでもありそう・・・。ぜひ考えてみたいわね。では又。千鶴子より



1977年4月14日

お父さま&お母さまへ

ふと妙なことを考えたのよ。私って我が家の三人娘の中でもどこか‘ぼんやりさん’のところがあるせいか、幼い頃からちっとも貧乏してるとも苦労してるとも思ったことないの。私が誕生したのはお母さまの郷里の秋田で、言うなれば私たち家族は舞鶴から疎開してきた人であったわけだけけど。お母さまは8人兄弟姉妹の末っ子だから、地元のたくさんの親族に庇護されて、お蔭でごく真つ当な生活が出来たわけだしね。でもその後、お父さまの勇断で「警察予備隊」に入隊するに至り、間もなく私たち家族は秋田を離れ、青函連絡船で海峡を越えたんだったわね。それから、北海道で駐屯地を転々としながらも、核家族として互いに身を寄せ合いながら、お父さまの薄給だけで切り詰めた生活をしてたかしら。

いろいろつらつら考えるのに確かに暮らしが慎ましかったと言え言える。例えば甘納豆の袋一つ、夜のおやつに甘党のお父さまが楽しんでいるのを私たち娘がちょっと幾粒か恵んでもらうとか、そんなことが嬉しかったりしたでしょ。札幌の「すすきのラーメン横丁」に家族総出で繰り出すのが最高の娯楽だったり…。それに薄ぼんやりした記憶なんだけど、確か旭川での話、吐く息が凍るような寒い寒い日、どこか駅の売店で、車を待つ間、あったかい瓶入りの牛乳とシュークリームをお父さまに奢ってもらったの。どうもお伴してたのは私一人だったみたいで、余計に得したって気分ですれほど興奮したことか。それが生涯に忘れ難い初めての‘贅沢の味’というか、‘大事件’だったわけで…。つまりは決していつも物質的に豊かに暮らしてたわけではなかったということ。それでもさほど不足にも不満にも思わず、天真爛漫というか無邪気に育ったのは偏にお母さまの躰けが良かったからでしょう。そう言えば、編み物機やらミシンでお母さまお手製の服を作ってくれて、いつも他のどの子も当時身に付けていないようなのを私たち娘三人は着ていたじゃない。おそらくお母さま生来の‘進取の気性’というんでしょかね。万事ハイカラというかオシャレでしたもの。それに、クリスマスにはお父さまがツリーの飾りつけをして、朝目覚めると枕元にプレゼントが置いてあって…。そんなこと有り難かったなあってしみじみ振り返って思う。それだからか、ついつい嬉しがって、事あらば親を自慢したい自分が頭を擡げるからちょっと困っちゃう(！)。

ご近所にトモエさんという日本人家族がお住まいで、ご主人は建築会社の方で目下海外研修中。今5ヶ月を過ぎたばかりの女の子の赤ちゃんが居るの。乳児観察の機会にもなるし、時折お邪魔させてもらうの。で、そのイクちゃんって子、湿疹がひどいの。3ヶ月頃には顔中

あちこち瘧のような具合で。今でも時折湿疹が出て、痒いのか、やっぱりひっきりなしに手で頭の辺を搔いているわけなの。皮膚はカサカサしてるし、奥さん頻りに心配してるわけ。就寝時には、しばらく放っておくと、手が頭の方へ行くと、頻りに搔いていて、それで余計にイライラしてくるのか、眠れなくなると言うから、私が、「撫で撫で」してやればいいって言ったの。とにかく初めての赤ちゃんで、それも外国での出産だからもう大変だったって。それに一度前に流産をしているせいか、ご主人に言わせると、とにかく奥さん心配性で、ちょっとしたことでもパニックになって大騒ぎしたんですって。イクちゃん、よく泣く子やったらしいの。痒いといっても搔かせてはいけなからって、ご主人と交代で赤ちゃんの掛け布団の両端を押さえて、赤ちゃんが手を出さないようにして、そうすると何とか眠るからって言うの。だけど、痒い時は搔いてもらおうと誰だっていい気分がするでしょ。そんな簡単なことなのにと思っ、ついお節介にも私の小さい頃の話をして差し上げたわけ。背中が痒いだの、頭が痛いだのって訴える度に、よくお母さんに撫で撫でしてもらったって。<いいお母さんねえ…>って、奥さん、えらく感心しはるの。それで自分もと思ったのか、「撫で撫で」を子どもの頭にしてやってたわよ！今頃の若い母親たちは抱き癖が付くとか甘やかすといって、子どもとの身体接触を避けようとする。それっていい効果をもたらさないと。‘お母さんの手’ほどいいもの無いのにな。「おんぶ」は勿論だし。母親にしっかり抱っこされて育ってない子はどうしても皮膚が貧相だということをよく観察するんだけど。そちら【整肢学園】の子どもたちはどうかしら？子育てがなにか奇妙に人工的・不自然になりつつある。親が体を与えることを軽んじるのは危険信号だわね。では又。千鶴子より

.....



1977年4月26日

お父さま&お母さまへ

今朝一度に2通のおたよりいただいて、喜んでます。私の方、仕事に没頭していて、いろいろと気持ちを忙しくしているもので、近頃ゆっくりと手紙を書く気分になれず、ご無沙汰しがちですのに。家からのたよりは頻りに心待ちにしているのですから、随分と勝手なのです。

ところで《愛鱗会》の京都支部大会で我が家の稚魚さんたちがえらいい成績だったとのこと、おめでとう！錦鯉の稚魚の選別なんて難しいよね。その将来性は不確かなものだから、敢えて買うのは‘博打する’と同じみたいなものだろうに、えらく当たるじゃない！やはり勘どころがいいと云うか、抜群にお父さまの眼が肥えているということの証しじゃない！嬉しいわね。

その錦鯉の取り持つご縁だけど。いつぞや舞鶴を訪ねた【英国錦鯉協会】のジャパン・ツアー一行の中にリズとマルコムご夫妻がいたのを覚えてるかな。リズは当時妊娠してて、お腹が大きかったはずだから、おそらく記憶があるかしら。かなり以前にもお茶に招いてくださって、赤ちゃんは誕生してもう8ヶ月になっていた頃。上の子は18ヶ月の男の子で、なかなか賑やかで愉しかったの。そろそろ春で気候もいいからと、また先日お茶に呼ばれたのよ。マルコムはこちらの協会の月報の企画やら編集を担当している方なのです。なかなかの‘鯉キチ’で、熱心でいらっやる。ご自宅はロンドンからかなり離れた郊外の住宅地なの。こじんまりとした赤い屋根瓦の庭付き一戸建てが整然と居並び、舗装も整備されていて、コミュニティの秩序・調和があります。リズとマルコムにしてもそうだけど、決して彼ら

は富裕層ではない。日本でいえば中流の‘サラリーマン’階層で、ごく真っ当な仕事を得て、そこそこの所得でといった印象です。ロンドンの通勤圏ではあるでしょうから、ラッキーと云ってもいい。そうだからか此地に暮らす人々には実に安らいで落ち着いた雰囲気があるの。それぞれのお宅が庭づくりに精を出し、野菜やら花を育て、互いに垣根越しのお付き合いを大事にし合ってる。遠くからでも姿を見かければ、ハロー！と笑顔を交わす。これぞ良き‘普通’の暮らしといった感じ。これ迄ロンドンでも高級な地域と呼ばれるSt. John's Woodのプレイ・グループに関わってきたから、そこでの子どもらと比較しても、リズとマルコム夫妻の子どもが格段に落ち着きの違うのには感動した。眼つきがはしっこくないの。顔の表情が全体にふんわりしていて、実にあどけないわけ。まるで「妖精物語」に出てくる子どもそのもの。特に下の子どもなんか、もう1歳ちよつとぐらいになってるけど、とても無邪気。私たちが夕餉をいただく前に済ませましよう、彼に就寝前の入浴をさせたわけなの。そしたら風呂上りの裸んぼのまま、そこらを飛び回って、時には目の前で‘股覗き’をやってみせたり…。それで、リズが、<あらまあ、チズコの前でわざわざ見せびらかし(Showing-off)しちゃって…>と、鷹揚に笑うわけ。リズやらマルコムの口から子どもらに<早く(Hurry up)！>という言葉は絶対に出てこないでしょう。子どもらのあどけなさ、屈託がない、葛藤がないということでもある。それは土地柄もありましようが、リズが専業主婦で、育児の時間がたっぷりあるということにもあるはず。ロンドンの子どもらって、概して我が強いし、そう簡単には人になつかない。それと比較し、なんて違うのかしら、実にいいものを見させてもらったと感慨深かったの。マルコムが裏庭のプールで飼ってる、ご自慢の錦鯉はともかくとして…！

昨今、人種の坩堝と化した、喧騒のロンドン中央から、生粋の白人系の人々がどんどん去ってゆき、ロンドン郊外へと移転してゆくと噂に聞いていたけど。マルコム一家のお住まいの地域では確かに、黒人系はともかく、パキスタン系がぞろぞろのし歩いているなどといった光景は見ることはない。つまり、うまく‘棲み分け’したことになる。実は、ロンドンの高級住宅街で有名なハムステッドなどが今どうなっているかと言え、どうやら元々住んでいた人たちは去ってゆき、空き家はユダヤ資本に買い占められてるといふ専らの噂。そして日本企業なり大使館やらの縁故を主にしての賃貸業という手堅いビジネスに落ち着いているみたいよ。ご懇意にしている谷口さんのお宅がそれ。見掛けはなるほどハムステッドといえるような、高級住宅街。建物も昔ながらに威風堂々の体裁で、街路樹も素晴らしい。だけど谷口さん宅を訪ねるときは、正面玄関ではなく、脇の階段を降りた入り口から入るわけ。つまりそのお宅の一角を間借りしてるってわけ。勿論随分高額な賃貸料だろうと思うけどね。だけど、やはり飽くまでもそこに自分たちは属していないわけだから、コミュニティ意識なぞ育ちようがない。よそ者同士で近隣だつて、誰が誰やらさっぱり分からない。だからその住宅街全体にやはり人のぬくもりがないし、寂れてゆく風情はどうしようもないのよ。いろいろと勉強になったわ。

私の方、仕事の実績はぐんぐん上がりつつあります。【タヴィ】のセミナーやら病院の会議の席での発言が割りと自由に出来るようになりましたし。なかなかここ迄来るのは一苦勞でした。‘日本の威信’を懸けてという頑張りが利いてます！ところでこちらで最近、日本の美術、絵やら陶器やらの展示会が目立ちます。ソニーやらスズキやらの工業製品の海外市場

獲得の成功とは別に、文化的な評価も高くなりつつあり、従って、この勢いに乗っかるみたいだけど、私は日本人として全然卑屈な思いをすることなく此地で頑張れているように思います。

では又、ご機嫌よう。 千鶴子より



1977年5月8日

お父さま&お母さまへ

だんだん暖かくなる気配が嬉しいです。美しい若葉が樹木にぐんぐん輝きを見せています。週末、こちらではひじょうに珍しくもいいお天気に恵まれて、私は裏の野原でお昼寝をしました。太陽の光は暖かくて、あんな風にホクホクと気持ちよく体が温かくなったのは、ここずっとないことです。いつでも冷え冷えした空気で、空もどんよりとしているのが常でしたから。日本での日曜日と言えば、お父さまやお母さまはどうしているかなと頻りに思われてなりません。庭で池の水に光が反射してキラキラしていたり、錦鯉たちがのびやかに泳いでいたり、お父さまはなんやかやとパタパタ忙しく立ち働いているでしょうし。お母さまの声も聞えるようで。そんな思いやらがいっぱい浮かんできて、まるで夢うつつにしばし日本と英国の物理的距離を忘れたかのようでした。

さて、今ロンドンでは、日本からの福田赳夫首相を交えて、第3回先進国首脳会議【ロンドン・サミット】が催されています。世界主要7カ国入りだもの。ついに日本もここ迄来たかと、終戦の当時国民が経験した、あの打ちひしがれた思いなどを想像して、終戦っ子の私なども何かしら感無量です。福田赳夫さん、こちらのどの新聞でもテレビ報道でも堂々として物怖じせず、各国のおえら方とも笑顔で談話していらして、おお凄いいじゃない！って感心しました。

昔からどことなく白人には卑屈になったり、幾分気圧される気分を味わったりするのが普通でしたのに、昨今まるで趣きが違って来た。経済成長の勢いがバッチリ背後にあるという思いがしました。ちょっと道端で通りすがりに<日本人か？>と呼び止められて、<金持ちの国だ。いや、たまげる！>などとお世辞を言われるのよ。日本の一般労働者がどれほど滅私奉公して会社のため国のため刻苦勉励しているのか、その内情も知らないのだからと、こちらの国の経済の落ち目と労働者の全体的な労働意欲の低迷などと比較して、内心複雑な思いです。

ところで、私、ついに【タヴィストック・センター】で臨床の仕事に取り掛かります。手始めに、まずは臨床例を1ケースからというところで、ぼちぼちの感です。セント・ジョージ病院の児童精神科外来とはかなり趣きも異なり、またなんと云っても、【タヴィストック】内での同僚たちは、訓練生という意味合いからして、それぞれ充分に指導も行き届いてますし。いい刺戟をお互いに貰ったりあげたり、私も今後ますます学びの機会になると喜んでます。お蔭さまで確かな線を行っているとは思いますが。なんと云っても、語学力の点ではまだ自分としては一人前とはどうしても云えませし。私なりのペースでゆくしかありません。但し、セラピイの仕事に関しては評価されてますから、卑屈になることでもありません。いずれ日本へ帰ってから独立〔個人開業〕してやれるだけの下地を作っておく覚悟であります。

ところで、ジョン・ブレンナーからスズランの鉢植えを一個貰いました。ご自宅の庭に咲いているのよ。北海道の美瑛でのスズラン狩りのこと、思い出されてなりません。あの頃を懐かしんでます。ではいずれ又。 千鶴子より



1977年6月10日

お父さま&お母さまへ

しばらくご無沙汰致しました。そちら日本の新聞に報道されていたかと思いますが、エリザベス女王が即位して25周年記念ということで、この暗いインフレの英国も例にないお祭り騒ぎでした。今週の月曜・火曜(6&7日)、特例の祭日となり、道路には英国国旗で飾りつけがあったり。店頭にはエリザベス女王の写真がベタベタと華やかに貼り付けられているし、誠に微笑ましい有り様で。各地で記念の催し物もあり、なんと云っても、皇室が最後の切り札というか、英国繁栄の象徴として、盛んに奉られているように思われました。日本でも国民が日増しに皇室から気持ち遠ざかり離れてゆくといっても、或一面、どうしても捨て難い意味を持つ存在なのだろうと、英国の例を観察しながら思うのです。

そういう次第だから久し振りに4日間連続の休みが取れて、私は仕事の整理も兼ねて、また休養も兼ねてのんびりするつもりでいたのよ。それが結構イベント続きになっちゃって忙しかったの。2日目の休日にはご近所に住むトモエさん宅を訪ねました。ご夫妻がほぼ同時に誕生日を迎えたとかで、ご自宅でホーム・パーティを催されたの。スペイン旅行から戻ったばかりとかで、あちらで調達したおみやげの蝦やら、ご馳走でしたよ。お越しの友人らはご主人の建築関係のお仲間。シモヤマさんもだけど、皆さん、日本の将来の建築業界を担うエリートってわけ。家族連れでいらしたから、狭い10畳ぐらいの一部屋に9人の大人、それに7人の赤ちゃんをも含めて、もう部屋中ごったがえしてたけど。よくもまあこのロンドンでこれだけ日本人の顔が集まったものだと感心するほどで愉快愉快なものでした。

3日目の休日には、ノエルとエルシイの結婚後の新居をお訪ねしたの。ノエルは私の【タヴィ】での同期生。アイルランド系でとても温厚な性格。初回の顔合わせのミーティング以来、ペチャクチャ気さくにお喋りする仲になってる。その後も時折互いに情報交換したり、特に「教育分析」の進展具合なんだけど、彼との比較においてこちらも自分の状態を見極めるといったふうで、とても得難い格好の話し相手なわけ。エルシイはソーシャルワーカーだけど、偶然ソーシャルワーカーの訓練のため、私のいる病院に来始めたので、新たに親交を深めているの。彼から彼女との馴れ初めも聞いていたし。時折【タヴィ】のパーティにノエルがエルシイを同伴してくるから自然私とも仲良しになっていたというわけなの。実は彼女の一家は、トルコ難民なの。政情不安から祖国を逃れ、此地に辿り着いた当時の親たちは職を求めることに必死で、だから彼女は幼少期、親には全然かまってもらえず、日がな一日お姉さんと二人、コットの中に放っておかれたらしい。うんと泣いたって・・・そんな悲惨な生い立ちだからか、どこか気の強いところがあるけど、根っからの頑張りやさんなの。そんなエルシイを好いた彼はやっぱりいい人だって、改めてノエルを見直したわけ。彼らたち、自分たちの新居を目下探しているけど、まだなくて、当面エルシイのお姉さん夫婦の一軒家に間借りしてるの。なかなか家庭的な情愛の濃い雰囲気、皆揃って歓待してくださり、たいそう賑やかな食事をご一緒に愉しみました。こうして時を経て、トルコ難民の二世世代はイギリスに根を張ってゆくと感じて、その逞しいのには感動した！

仕事は全体に順調に行ってます。来年の暮れには日本帰国を一応目指してますから、これ迄にこちらで手掛けた仕事を少しずつ

整理し始めています。それで又いつ英国を訪れる機会があるやらないやら解かりませんし、今のうち出来る限り多くの方々から刺戟を得ておきたいと願ってます。実際に、私の方の実力がメキメキ付くにつれて、ますます【タヴィ】のコースの教官方からご指導を仰ぐ意欲も出たところですよ。差し当たりちょっと目論んでいることがあるの。過去2年間の《プレイ・グループ》での幼児らの遊戯観察の資料をもとに、将来日本で本にして出版することを意図してて、それら記録をまとめて掛かっています。専門の心理臨床つまりセラピー・ケースの記録の詳述よりも、むしろそれ以前に、専門過ぎないという意味でも人々に受け入れやすいかなと思って。それでこの際個人指導 Private Supervision を受けるのがいいと判断したわけ。観察した素材にさまざまな別の視点を貰うことは大いに意味深いでしょうからね。近々Kate Paulとおっしゃる若手の優秀な方をご紹介いただくことになりました。そうとなれば、余分な支出が今後要ることになりましょ。それでつい先頃お母さまからお知らせいただきました、来月分の£180ポンド送金の件。やっぱり有り難く戴いておくことにします(!)。調子がよくてご免なさい。誠に有り難いと思っていますのです。ではいづれ又。ご機嫌よう。 千鶴子より



1977年7月7日

お父さま&お母さまへ

久しぶりの写真を眺めて、家族皆が元気な様子で安心しました。佳織ちゃんが大きくなったわねえ。赤い頬っぺたがまるで林檎みたい！サッチャンの小さい頃に似ている。すくすくと育ってくれていることは一番の親孝行で、私なんかも異国の地でこれといった病気も無しです。ですから、考えてみれば幸せなことです。

シモヤマさんとこの下の男の子が2ヶ月前、熱が全然引かない、風邪を引きやすいというので精密検査をしてもらったところ、白血球の数が少ないとかなの。こちらの病院はとにかくやるのがのろいので、幾度も検査入院を繰り返す、傍らで見ている大変な様子なのです。何となく血色が悪いし、8ヶ月過ぎた男の子にしては元気がないのが気になりますし。それを除けば這い這いするやら一応順調には成長しているみたいですけど。どうやら免疫系に問題ありらしい。薬物治療で対処できるでしょうし。丈夫に育ってくればいいかと祈っているところです。

さて、先日、英国エリザベス女王即位25周年記念行事の一環として、ウエストミンスター寺院で《花と音楽の祭典》があったのです。その折、草月流の家元の娘である**勅使河原霞**さんがお見えで、聴衆の前で活け花を実演してみせて下さって、大層の盛況でしたの。寺院内にも、御所車をかたどった容れものにごく大振りに創造芸術風に松やら菊やら活けたのも飾って置かれてました。こちらでの活け花熱も次第に高まりつつありますね。此の度大変な反響を得て、**勅使河原霞**さんも大した親善外交をなさったこととなります。お召し物も素敵でしたよ。殆どが英国人である聴衆に向かって、ごく普通に日本語で活け花の由来やら技術を親しげにお話しなされて、通訳は日本人の男性でしたが、周到な下準備もあってか満点の出来でしたし。花がなかなかの見栄えでした。私はどちらかというと、ごっつい大振りのものより昔風の立華やら盛り花やら投げ入れのものに感銘を覚えました。面白いことに、おそらく実演慣れしておいでなのでしょう、テーブルの後ろ側から聴衆に向かい合う形で花を活けられたのよ！それが前から手直しせずとも全体のまとまりが実に決まっている！

ああいうことはやはり磨かれた精進の賜物だと感心したものです。背後に控えるお弟子さんたちの挙措動作の見事なこと！実にピシッとしているのよ。一人は若い娘さんで振袖姿、あと3人は男性でキリッとした袴姿。そうした舞台演出も華やかで洗練されており、手際よく一つひとつ出来上がった活け花の作品に取り囲まれ、皆さん方、実に実にお美しい！日本の活け花はアートだという大した印象を残して大成功でした！なんとも誇らしい思いが致しました。私も将来、余裕が出来た時点で活け花を習ってみようと思ったほど。ブラボー！ね。いずれ又。千鶴子より



1977年7月17日

お父さま&お母さまへ

毎週毎週忙しく時が過ぎていきます。早、7月の半ばを過ぎ、人々は夏季休暇を間近にして浮き足立っています。先日は、私の病院で指導してくださってるジョン・ブレンナーが今週末早々に6週間の休暇をとって郊外へ出掛けてしまうの。ヨット三昧なんですよ。それでご自宅を留守にするから庭にせっかく見事に咲いている薔薇が勿体ないと云って、私に取りに来るようにおっしゃって、ついでに晚餐もご家族と一緒にご馳走になったのよ。それでまるで花屋さんを開店できるほどにわんさと庭の花たちを切ってくれて、それをご自分の車に乗せて、わざわざ私を下宿先まで送り届けてくださったという具合でしたわけ。

その翌日、偶然【タヴィ】のコースの私の指導教官の **Margaret Rustin** に会うお約束があったものだから、ついでにと彼女に大きな花束を贈呈したというわけ。とっても喜んでもらいましたよ。それからまた夕刻にもう一軒、以前からのちょっとした知り合いで、ご馳走をもらった

御礼にと思ってお訪ねしたの。ミツエさんという日本女性で、英国人でオーボエの演奏家と結婚しているのだけど、そこにも花束をお届けして喜んでもらいました。私自身のフラットにもあちこち大層晴れやかに色とりどりの花が飾り立てられ、もうほくほくと嬉がっていました。その彩りがなんとも豪勢なの！今ちょうど此地は薔薇の盛りの時期で、そのかぐわしい香りは英国での良き思い出として生涯心に残ることでしょう。

先日 £200ポンドの送金を受け取りました。いつも多額な仕送りを受けて、有り難く思っているのです。随分無理しているのかしらって、心配なくらいです。私の方、サラリーはほぼ変化無しです。交通費・食費、次々に値上がりしています。けれど、日常の生活に必要なものと云えば大したものじゃありませんし。夏服は去年お母さまに買ってもらったものがたくさんあるし。私はこれ節約にと努めています。症例を多く抱えるほど、それだけ個人指導してもらいたいという意欲も出てくるし。有料なわけですから、それに備えて今から極力節約し貯蓄をしておきたいと思っています。【タヴィストック】で一つ、大層面白いセラピー・ケースを担当することになりました。どんどん実力が経験とともに培われてゆくの解かります。【タヴィ】での仕事は今のところ無給ですが。このインフレで、たくさんのサイコセラピストが無給で仕事をもっていると聞いてますし。私などは、その点、病院で支給されている職を得ているのだから、随分と恵まれている方です。また、来学期になって落ち着いたらサラリーが出る話もあるかも知れぬと期待していますが、どうなりますやら・・・ただ、私は仕事が出来ると認められてきているせいか、ごく当たり前みたいに優遇されて、随分いい経験をさせてもらっている。ほんと有り難いと思っています。

一時帰国したのが去年の夏なのだけど、随分昔に思えます。お母さまもあの頃とは見違えるほど本調子を取り戻されておいでなのが嬉しい限りです。私もこの1年よくぞ頑張ったという思いです。京都の祇園祭に出向かれたお話など、聞けば懐かしいという思いはあるものの、何やら多忙で仕事に追いかけて回されているせいか、近頃では‘日本恋し’の思いも、そうそう浸りきってもおれない、そんな心境の変化です。

もはや‘日本恋し病’ではないにしろ、最近、美術雑誌【太陽】の特集号『広重』を見る機会があって、その「東海道五十三次」の一つひとつの絵の色柄といい、構図といい、本当に優れているのには感激しました。日本に居た頃はあまりにも見慣れ過ぎていて、どういう感激もなかったことを思えば、外国にいればこそ改めて認識できる‘日本の美’があることなど、いろいろ面白く思ってみるのです。帰国後、何はさて置いてもお父さまの蒐集している美術全集をじっくり丁寧に見せてもらおうと心待ちにしているのよ。ついこの前だけど、『ビクトリア・アルバート美術館』に出掛けました。日本の18、19世紀の絵画・工芸品の展示コーナーがあり、あんまり面白いものだから幾つかスケッチしてきました。なんと木彫の地蔵さんが一体あるのよ。それに縄文土器も！その他にも、日本刀やら、それに象牙の根付けなんて龐大な数のものが・・・。‘美’の鑑賞という点から云えば、こうした‘日本の美’なるものが、その審美性において、極東という地域性を超えて、国際的な評価づけがなされていると思えば、なにやら嬉しいやら誇らしいやら。でもどこか不慣れな異国に運び込まれて、＜お役目、ご苦労様！＞って感じ・・・やむを得ないかしら？！ では又、ご機嫌よう。 千鶴子より
.....



1977年8月3日

お父さま&お母さまへ

こちらの気候はだんだん半袖の服が欲しいぐらいの暑さになりつつあるけど、概してのぎやすい涼しさです。そちらはだいぶ暑くなったとのことですね。シモヤマさんとこのお母さまがわざわざ東北・仙台からお越しで、私がお会いした折、そうおっしゃってました。まあ、よくぞ一人で遠路遥々と感嘆頻りでしたけど。こちらの税関での入国審査も、英文で書いてもらったものを持参してたから何ら問題なしで簡単に通過したんですって！レンタカーを借りて、唯今家族全員お揃いでお母さまを観光にご案内してあちこち遠出しておられます。いいわねえ！こんな‘親孝行’をしてもらえるなど戦中派の親たちの誰しも夢みることのなかったことでしょう。それぞれ‘自慢の息子’やら‘自慢の娘’やらのお蔭かな？ 私たち世代も敗戦日本を支えて頑張ってきたというわけだ。感無量です！そして、さて次はお母さまの出番かしらね？！

去年の今頃は、日本に居たのよねえと感慨に耽ったりします。庭の水の流れやら鯉やらの泳ぐさまなど眺めて過ごした時間を思い出して、去年といってもほんの昨日のことに思えるものね。そういえば、麦茶やらコーヒーの冷えたのやら懐かしいです。こちらの夏の食生活はその点ほんと張り合いがない。暑い日などはせいぜい素麺の冷たいのを用意することにしてますけど。冷たい素麺がはらわたにジーンと来るほどの冷たさを必要としない暑さなので、またまた張り合いがありません。焼きナスやらの夏の料理も、そんな美味しいナスなどこっちには無いのです。薬味の茗荷の刻んだのも食べたいわね。残念ながら此地は実に季節感の乏しい土地柄です。

マコさんがインドネシアへ外遊してくることで、あの人のいつもの気概には感心します。まあ云えば、ここが外国だからか、私などは海外旅行というものにどうも関心が向きません。こちらに海外研修でいらしてる若手建築家の皆さん方はやはりヨーロッパは近いと感じるせいか、この際とばかり勇んでフランスのパリは勿論、あちこちにお出掛けです。モロッコやらも…。私などはもう一つ億劫がってる。別に私の場合、彼らのように、建築物に興味があるわけじゃないからだけど。それにどうしても【精神分析】というのは専念すればするほど、自然と心の内側へとめり込む。創始者フロイドじゃないけど、それって確かに‘汽車の窓から外の景色を見る’ようで、尽きない面白さがあるの。だからついついそれに魅了されてそれ以外のものに殊更目をくれる余裕をなくしてゆく。しかしながら、‘仕事中毒’も‘セラピー中毒’も決してよろしくはありませんわね。此地では、休暇中にどこへも出掛けなかったなどというのは肩身が狭いの。可哀想がられるのは厭ですし、取り敢えず計画はしてあるの。うんと夏季休暇を愉しんだということにしなきゃなりません(!)。これって妙なプライドだけど…ね。

明日が勤務の最終日で、3週間の休暇に入ります。レポート書きやら身の整理を終え次第、2、3日は南の海岸沿いに旅行してみようかと、そのつもりでいます。近頃、毎週毎週がワアワアという忙しさに追まわられていたから、見知らぬ土地へ旅してみるのも、日常性から脱して、しばしい息抜きになると思ってます。仕事一筋という生真面目さを捨て、目をパッチリと‘内向き’から‘外向き’へと切り替えて…。さてさて、どんな出会いがあるものやら。

では、ご機嫌よう。 千鶴子より

.....



1977年8月25日

お父さま&お母さまへ

ここ、コンウォールから絵葉書きを同封致します。目下、3週間の夏季休暇を愉しんでいるところです。ロンドンではお気に入りの『テート・ギャラリー』に出掛けて、ふんだんにある現代イギリスアートの絵画コレクションを堪能しましたし、また日頃読めずに読みたいと思っていた本などを読み漁ったり、かつ真面目にレポート書きなどして2週間を費やし、ようやくロンドンから6時間掛けての汽車旅でイングランド南西部の海岸地方コンウォールに到着しました。

ロンドンはずうっと曇り空で、なんともうっとおしい気分でしたが、ここコンウォールの気候は晴れやかで、光溢れ、まばゆい海の光景が眼前に広がってます。陽の光を思う存分浴びています。青い空と海を眺めながら、沿岸沿いをぶらぶら歩いていると、湾の様態が舞



鶴湾にも似ているのが懐かしい！勿論その規模はこちらの方が大きいのですが。また、ヨットやラポートやらスポーツ熱の盛んなところですから、



海は行き交うヨットがあちこち点在し、彩り豊かに絵模様を浮かばせてます。

さて、半島の先端近くの北海岸のセント・アイヴス St.Ives という町を訪れております。その景観ゆえに多くの芸術家がこの地に惹かれて住処とし、コロニーを作ったことでも知られてます。抽象絵画の旗手ベン・ニコルソンやらそしてその妻で

もあった女流現代彫刻家バーバラ・ハップワースの活動拠点でもありました。この海辺の街は多くのアトリエやら陶芸工房、ギャラリーなどで賑わっていて、ブラブラ歩きが楽しい町なのですが、なんと云っても、私のお目当ては『バーバラ・ハップワース美術館・彫刻庭園』。入園し、気儘にあっちこちうろつき、展示物を十分に堪能しました。造形美でも‘抽象’というのはよく分からないながら、具象が抽象化されるとは、自分の中に何かその人固有の‘規範’みたいなものがあって、それに則ってこれは自分にはこう‘見える’ということを通じて深化させてゆくことなんだなと痛く心打たれました。「精神分析」にも一脈通じるような・・・とにかく表現者の精神の自由、そしてその強靱さということでは強烈な印象が残り、圧倒されました。

ただ一つ、庭園を散歩しながらふと思ったの。そこにはバーバラ・ハップワースの大理石やら青銅の作品が所狭しと屹立している。結構大掛かりなものだけど。なんだかひどく息苦しい感じがしたの。野外でそれらが風雨に晒されても決して朽ちないということに、逆説的だけど、違和感を覚えた。芸術作品の永久保存という点から材質は選ばれ、当然ながらいつまでもそのまま不変不朽であるのがいいに決まってるけど。日本人の感覚には抵抗があるの。頑丈過ぎるというか、これ見よがしの威圧感があるというか。どちらかという日本風の石仏の脆さが懐かしい。あの朽ち果ててゆくものの尊さが・・・創造とか表現といったものに一抹の‘無常観’が漂うといった何かが無いとむしろ物足りない。私にはそんなこだわりがあるんだなあ、と改めて気づかされたことが愉快というか、途方もない妙な感慨を抱いたものです。もしかしてこれって、日本の精神土壤に「精神分析」を移植するにあたっての留意点として、何やら示唆するものがありはしないかと、

そんなこと頭の中で臆に考えていたり・・・なかなか刺激的な旅のひとつでした。決まりきった日常生活からしばし逃避できて、また或る意味これ迄の仕事の総括も出来たといった具合でしたから、私はひどく喜んでおります。

日本は今頃、暑さの真っ只中でしょうね。冷奴やらお素麺、それに茗荷の刻んだのやら、思い浮かべると妙にそわそわします。風鈴のチリンチリンやら朝顔市やら、夏の風物詩はその季節の食べ物とともにありますからね。猛暑にフーフー喘ぎながらも、なかなか妙趣のある暮らしとも言えましょう。ところで、ここ1週間ほどロンドンで《歌舞伎》の旗揚げ公演がありました。私、勇んで観劇に出掛けてきました。あの彩色、そしてあの形式美！猛烈に感激して目頭の熱くなる思いで、なかなか日本人というものに新たな懐かしさを覚えてなりませんでした。

ではいずれ又。 千鶴子より



1977年9月3日

お父さま&お母さまへ

私も休暇明けで仕事に戻っています。セント・ジョージ病院で私が担当するセラピー・ケースの報告書を提出する時期になっていまして、記録の整理に忙殺されてます。これも自分の仕事を振り返り、冷静に評価してみるためでもありますし。なかなか面白いです。だんだん精神的なもの見方・考え方が習得されつつあるのが解かります。自分のこれ迄の進歩にかなり満足している状況と言えます。日本に戻る前にこちらで一応ちゃんと認められるレベルに達したいと願っていたことが少しずつ実現しているわけです。なんと云っても日本へ帰ってからのことは重大な‘移植作業’を意味しますので、

こちらで十二分に栄養を付けて、根をしっかりと育てておかないといかんわけです。本出祐之先生が去年に引き続き調査のため7月の半ば以降渡英されてこちらに滞在しておられますので、時折お会いしていろんなこと話題にしますけれど。本出先生が言ってらしたの。盆栽などの場合でも、まず枝々を短く剪定し、その上で移植すると成功するんですって。私の場合もそれと同じと言えそうです。あんまりもてはやされて他人に踊らされて、それで自分を見失うのは禁物です。将来をよくよく検討して、と肝に銘じているところ。小此木啓吾先生もおっしゃってたわ。外国留学から戻って3年はすごく張り切っていても、その後どんどん尻すぼまりになってゆく人の例が多いんですって。つまり‘移植作業’に負けた(失敗した?)ということなのでしょう。帰国は来年の末頃と思っていますので、その心準備やら体勢をそろそろ考えておくなりしなきゃいかんと思っていますところですが、でも、何がどうであれ、実際に実力が付いていることは有り難くも事実で、将来、日本においての自分に行く末についての私自身の不安・動揺は殆ど消失しています。要するに、自分を甘やかさない自信があるというわけです！

人生は生きてみなきゃ解からんもんやとはかねがね思うことだけど・・・私も30の齢を過ぎて、世の中の次第・様子が少しずつ解ってきたのがすごく嬉しい！ようやくにして気楽な気持ちになってきました。しんどく生きてもダメだわね！私は大変な仕事に携わっているのは確かだけど、大して屈託もなしに生きてる！ここに至り、切羽詰まったみたいな気持ちは殆どない。ラッキーなんやなあ、まるで・・・！ほんとに両親のお蔭さまで。感謝感謝の思いであります。

では又、ご機嫌よう。千鶴子より



1977年9月30日

お父さま&お母さまへ

日本は紅葉の季節を迎えていますか？
こちらは滅多に紅葉は見られません。街路樹の葉が黄色っぽくなるぐらいです。それでも近頃はやはり秋の気配というか、肌寒くなりました。今頃は日本で何が美味しいのかしら。秋の味覚って何だっけ？ ついあれこれ食べ物が頭を過ぎります。松茸とか・・ね！

英国では概して海外のニュースを報道することには熱意がないように思われるの。それがこぞうっと日本の赤軍派の飛行機乗っ取り事件を第一番にニュースの時間に出しています。日本の経済成長と並んで、どうも日本人の‘精神構造’が不可解極まりないものとの疑心がいっそう募ってきているみたい。嘆かわしい！

英国では、経済的には勿論、生活全般において、国民の覇気が低迷しているせいか、ますます保守的になっていて、良きにしろ悪きにしろ革新的なものには盛り上がり欠ける。パンク・ファッションとか一部若者たちの音楽の方ではそこそこ騒いでいる連中はいるとしても。ロンドンの片隅のごくマイナーというわけで、私の耳にはまるで届かない。此地のかつての戦中派がなお記憶にある忌まわしい捕虜体験などからして、日本は野蛮で非文明国というイメージに後戻りしかねない。この暴挙に「日本人、恐るべし！」の忌避感がふり返される。つまり話せば分かる相手ではないと見做されることは国際外交上、どうしてもまずい！ あの大仰な身振りが小児的で自己陶醉だよ。動機は単純かつ幼稚にしても、行為の危険なことは甚だしく、いかにも島国根性が抜けてない。日本はまだまだ‘前近代’というか、‘反近代’だということが露呈される！

ところで先日、パスポートの期限が切れて再申請を出していたら、「永住権」の認可の意を《Home Office》から伝えてきたわよ。5年滞在が過ぎるとそういうことになるらしいの。ちょっと政策として甘いなあ、と一瞬危惧を覚えた。移民・難民に対して門戸を開けているのはいいけど、国益からして帳尻が合わなくなっているのは目に見えてる。医療事情が途轍もなく悪化の一方です。ベッド数が足りず、手術の後にすぐ家の方へ送り返さなきゃならないとか。癌の兆候が現れても、検査迄に何週間も待たされてということらしい。食料事情が悪いのでほぼ一定の高齢になると、多く人々（特にスラムの多い地域）はリュウマチに悩まされる。大して対策も講じられずに干からびていって老化現象を深めていくらしい。精神病院は最も苛酷らしい。看護の手が足りず、患者たちは自分たちが垂れ流した尿・糞便の中に暮らしているという有り様で。それでも一定の食費の予算は費やされているわけだから、国家医療費の問題はますます深刻かつ混迷した状態となってゆく。ところで日本で一人子どもを産むのに30万円掛かるって本当？ こっちは無料なのよ。どっちが是か非か解かんないね。唯、産むのはただとなると、その後のなんら責任を持たない移民の人々もどんどん産むから、医療費と共に生活保護費もかさんでくるわけなの。とんでもない不穏な世相ですよ。まあ、私の永住権に限って云えば、来年また滞在許可の申請の手続きをしなくていいし、面倒が省けて私としては楽な気分になったわけ。でも、まあ、驚いたわね。5年過ぎたのだね。私、よく頑張ったと思うわ！

でもね、運命が拓かれてゆかってほんと不思議だよ。ミアナという女性がいるの。【タヴィストック】のシニア・コースにいる先輩で、年齢は私よりも一回り上。彼女、旧ユーゴスラビアか

らの政治亡命者なの。かつて欧州大陸で風靡した「ジャポニズム」の名残りか、すっごく日本鼻屑みたい。それでいつか【タヴィ】で会合があった際に、彼女の方から私に声を掛けてくださったというわけ。こちらに辿り着いてからしばらくは随分と耐乏生活を余儀なくされて、ホテルの受付嬢して食いつないだとか、苦勞なさってるの。今尚【タヴィ】でトレーニング中の身分ではあっても、大學で非常勤講師のポストを得て『乳幼児観察セミナー』してるんだとか、すっかり安定してらっしゃる。何しろ結婚した相手が生粋のイギリス人の精神科医なのよ。彼女の「教育分析」の費用も彼に出してもらい、毎朝のセッション〔週5回〕には彼に車で送ってもらうとやら。それがずうとだよ。どういう経緯で彼らが出会ったのかは聞いてないけど、英国紳士特有の‘中世的騎士道精神’というか、なんとも‘義侠心’のある方だと、彼女のご主人に興味があったの。

そしたら、或会合が終わって車で迎えにきたご主人にご挨拶されて、私もその車に便乗し、そのまま軽食を取るレストランに皆で立ち寄ったわけ。さて、勘定(ビル)を払う段で、勿論彼が払おうとするから、私の分は私が払わなきゃと申し出たら、否、大丈夫だと彼が請け負って、自分の財布をパッと拵げたわけ。そこにはバンクカードが4、5枚びっしり並んで収まった。バンクカード、つまりはクレジット・カードというわけだけど、それは‘ステータス〔社会的地位〕’の象徴なのね。強烈なインパクトがあった。どんなに背伸びしても財力という点ではとてもとてもかなわないと圧倒される思いで。それで殊更ミアナが羨ましいということでもないんだけど。運命って拓かれてゆくもんだなあ、と妙な感動を覚えた。

実は気がつかなかったけど、此地で私の身边にも「政治難民」やら「政治亡命者」とかは結構たくさんいるんだわ。【タヴィ】のすぐ近

くの或る庶民的な食堂に、ミアナに連れられて行ったの。つまりはそこ、大陸からの難民・移民・亡命者のたまり場だったの。年輩の方たちが多いせいか、店内はちょっと独特の、哀愁というのか、重たげな空気が漂っていて…。そこでミアナと私が注文したメニューは深皿にたっぷりのスープとパンだけ。そのスープは豆類やら穀物類が煮込んであって、量的にも中身的にも大満足。それだけでお腹いっぱい、ひもじさなどから解放される。とにかく価格が安いので助かるわけ！

やはりミアナって、根っからの苦勞人のせいか、甘えた感じの人には容赦ないというか、ちょっと辛辣になるのは否めない。アメリカ・カルフォルニアから来ているキャロラインの噂話になって、日頃彼女が赤いポルシェなどを乗り回しているのが気に入らないのか、私が、<彼女ってこちらで‘一流 first-class’のアナリストに個人分析受けてるって聞いたんだけど、誰かと思えばそれがハンナ・シーガルなんですよって…>と言えば、<彼女はペーパー・ドル〔張子人形〕だから…>ってバツサリ！つまり所詮、‘張子人形’だから、アナリストが一流だろうと彼女が一流になる保証はないというわけよ。そんな調子！キャロラインの親はどちらも富裕な分析家で、しかも再婚同士。親の離婚を巡ってのなんらかの軋轢のせいか、彼女も彼女の妹もセラピイを受けたとか、受けてる最中だとか聞いている。なにかと言えば、すぐセラピイというのがあちら流。親に敷かれたレールであっても、それはそれ、恵まれていると言え言えなくもないわけで。おそらくキャロラインの苦勞はあるはず。だけど、ミアナの過去の経歴を詳しくは聞いてはいないけど、やはり大陸の戦火を逃れて、此地で自分の居場所を得た彼女の、その氣骨はまったくブラボー！だと思う。人間の値打ちなどというものはほんと分からないものだけど、やはり彼女には感心するものがある。

そのドン底から這い上がった苦労人のミリアナが【タヴィ】の同期生で一番仲良しなのが英国貴族のエリザベス・カートライトだから面白いなあと思っちゃう。そんなこんなご縁で、私はエリザベスから近々彼女のお館に招待されることになってます。いずれご報告しますからね。

【タヴィストック】で始めたトレーニング・コースは順調にうまくゆく気配です。いずれ個人指導 Private Supervision をどなたかをお願いなくてはなりません。【タヴィ】の系列で次々に一人ひとり優秀な逸材に出会い、交流を拓いていってることが大きな自信になります。こうしたセラピスト養成の指導体制はやはり掛け替えのないものに思われます。【タヴィストック・クリニック】のような研究及び養成機関を日本で設立しようかしらね。そんな夢を抱きながら、実のところ、まったく一文無しなんだから！笑えちゃうかな。でも、つまりは運命がどう拓かれてゆくかだね。

では又、ご機嫌よう。 千鶴子より



1977年10月25日

お父さま&お母さまへ

このところ、英国には至極珍しい秋晴れの天気が続いて、いよいよ日本の秋の風情を懐かしむ想いが募ります。公園に栗拾いに出かけたと誰かが云ってたけど、実際まだ店頭には栗なぞ出ていないのです。そちらは如何ですか？

ところで天候が急に崩れて、ここしばらくどしゃぶりの暗い空模様なのです。それがまた週末に入って天候がまたガラッと秋晴れになったもので、郊外の《エッピング森》へと出掛けてきました。地下鉄で1時間ほどのところですが、こんもりと樹木が茂り、陽射しにも恵まれたせいか、

なかなかの趣きでした。ちょうど樹木が黄づいて落葉になりかけのところ。葉っぱがパラパラと地面に降るように落ちるところがまた格別でした。残念ながら栗の木はなくて、どんぐりが落ちてた。椎の木もなかったの。がっかりというわけでもなく、昔家族皆が裏山で「椎の実拾い」をしたことなど懐かしく回想してたの。‘童心’に帰るといふか、ほんと気持ち若返った！それからがびっくり！大粒の野いちごの実が漆黒色に熟してるのに偶然出会い、失敬して猛然とパクつきましたよ。《森の子ども》の気分を満喫したってわけ・・・！

正直言って、私は断然この都会生活に飽き飽きしてきました。少しずつ公衆道徳もおかしくなっているみたい。まだニューヨークのような物騒な事態には行ってませんが、ちょっと場末になると殺傷事件も起きていますので、ロンドンもそのうちにはという気が致します。日本のように、お互い日本人同士気心を許し合うみたいなこと、全然此地では有り得ないのです。

つい先日珍しく午後暇になったので、気になっていたクリスマス・プレゼントの買い物に出掛けました。やっぱりチョコレートというところに落ち着きました。今回は、チョコレート専門店でごっそり買ったので、以前のよりも高く付いたけど（スイスやら西ドイツ・オランダやら外国製が多く揃えられている店なのです）、2回ほど買い物袋にごっそり買って、やっと段ボール箱に上手に詰められたので満足しました。お正月末頃に日本に届くでしょう。‘蝦で鯛を釣る’ということになるかな。それでもお父さまやお母さまが喜んでくれたら、私も嬉しいです。お蔭さまで私の方、全然生活には支障なく、何不自由もしておりません。白菜やらも出始めて、やはり時々日本食が欲しいので、近くの『東京屋』から揚げ物やら納豆

やら買うことがあります。あれやこれやで仕事の方、奮闘しています。では又。お風邪を召ませぬように。ご機嫌よう。 千鶴子より



1977年11月24日

お父さま&お母さまへ

随分寒さを増した今日この頃です。お元気でしょうか？こうして冬の季節を迎えると、日本の甘い蜜柑が恋しいです。こちらのグローサリーで手に入るのは、どうせスペインからの輸入ものではあるのですが、なんとも美味しくなくて、一つ食べては残念、もう一つ食べては残念。で、外れだと、又もう一つと。それでも諦められずに手が伸びるという具合です。それがヒョンなことで、これこそ日本の蜜柑の味だわ、と発見の喜びが湧き起こり、意気込んでさらに同じ店屋に行き行って手に入れてみれば、味はまた残念なことだ、当たりの良さ・悪さは日本でもあるけど、まあ、こっちでは諦めた方が無難だわ。。

さっき傑作な話を一つ聞いたの。庭を持つことはこちらでは非常なる贅沢だから、代わりに人々は室内用の鉢植えを買い求めるの。考えてみれば、植物の生育条件としてはなんとしても不自然だけど仕方ないわね。ところが、サツマイモを下半分ほど水に浸した形で皿に置いておくと次第に上半分から芽が出てきて、そりゃみごとな蔓(葉)が茂ってゆくって。それが観賞用というわけ。簡単だから是非やってみようにと勧められたの。なんだ、サツマイモ畑を覆っていた葉っぱのことかと思ったら可笑しくなったわ！その人に言いそびれたけど、私たち日本人はそれをお浸しやらにして(茎のところ)食べるって言ったら、なんと言うかしらね。その方は英国人で、大の日本鼻根！盆栽のことに興味があつて、だから

あれこれ実際やってみてるんですって。。！つまりは自然に飢えているってわけ。

そう云えば、トマトの木を植木鉢に入れてご大層に居間に飾ってあるのをよく見る。なんともねえ。。。自然がこれ程までに縮小されたのだから唖然とする。実際のところ、私もお母さまに倣って短歌づくりをしようかとふと思いついても、辺りを見渡してみてもそういう風情を愛おしがる光景がまずありやしないわけ。なんともつまらない。光が乏しいせいかしら。但し、街頭のランプに照らされた樹木は美しいけどね。でもそれだって、なんとも人工的で都会的で、昔薪火の灯りで微かに見たという夜桜の風趣にはほど遠いでしょう。ではいづれ又。 千鶴子より



1977年12月12日

お父さま&お母さまへ

ようやく近頃、出不精の私がパリに訪れてみたいと思い始めたのよ。『ルーブル博物館』を始め、パリ市街は色んな美術館が目白押し。東洋美術の蒐集で有名なギメ美術館も。ぜひパリのそぞろ歩きをしてみたい。これって随分余裕が出てきたというか、なかなかの進歩なのです！クリスマス前にも思ったけど、年末は何やらジメッと暗くて気持ちが減入りやすいですし、独りでパリなどろついでいない方がいいかなと思った次第。むしろ4月の復活祭の頃は気候もいいらしいですし、そうすることに致しました。今からフランス語に耳慣れておかなきゃね。唯今猛特訓中です！正月といえば、日本人家族で親しくしている人たちに会うやらで、独りでゆっくり骨休めしようかと思うのだけど、そういうわけにもゆきません。職場でもクリスマス・パーティがあるんですって。まあ云えば、日本でも忘年会やら新年会やらであたふたするわけで、どこも同じね。

やはり学期末というのは、なにかしら緊張感を程々に解きたいと思うほどの疲労感を覚えるわけで、休暇が待ち遠しくなりません。

ご近所のお付き合いのある日本人のお宅の1歳半の女の子、麻疹になったんですって。その昔、幼児期に麻疹になったことなど思い出しました。北海道・月寒に居た頃だったかしら？娘たち3人一緒に枕を並べて、赤い顔してフーフー言ってたかしら。裏の果樹園からお見舞いのお林檎を籠にどっさりいただいたり。たまたま訪れた本荘の伯父さんから飾りの羽子板を貰ったのよね。とても慰められた記憶がある。私ら子どもは幼くて色んな病気もしただろうけど、あったかい布団やらやかんの湯気やら冷たい林檎やらと、何やらよく看病してもらったことが記憶の底にあるせいか、むしろ嬉しい懐かしい気分にはさせられます。お母さまは『舞鶴総合病院』では首席卒業なんだし、あのままずっと看護婦の仕事を続けられておれば、今頃もっともって待遇のいい地位に収まっていたでしょうね。キャリアの年数が少ない分、致命的な損をしているのは間違いないけど。私たち娘らがそのお蔭を得ているのもまた事実です。退職した後のことなど、私が傍にいて話を聴いてやれずに残念ですけど。もう直ですよ。では又、ご機嫌よう。 千鶴子より



1977年12月20日

【タヴィ】でミアナを介して知り合った英国貴族のエリザベスに誘われてお邸を訪ねました。エリザベスは、お兄さまが事故死されて、予想外の展開でカートライト家の領主の座を相続したらしい。そんな折の精神的なストレスもあって、セラピイを受け、それがきっかけで「精神分析」に興味を抱いたらしい。さらに【タヴィ】で

のトレーニング・コースの訓練生になった理由というのも、本人に言わせれば、<だって、他ににもすることがなくて>というから愉快なの。そんな彼女の事情も今回の訪問でなるほど納得。実はフォックス・ハンティング[狐狩り]の見物に誘われていたんだけど、早朝予約してあったタクシーが来なくて、予定の汽車に乗り遅れ、結局私は間に合わなかったんだけど。とにかくエリザベスは地元ではいろんな行事を率先して主催してはならない立場みたい。フォックス・ハンティングやら、他にもキャリッジ(馬車)競走とかも。だから厩舎は勿論、日頃から馬の調教をも万事怠りなくしておかなくてはならないし、馬車も整備しておかなくてはならないし。それらは総て彼女の采配で、電話一本で指示を出すだけ。後は使用人たちに任せるだけだから、自分は何もすることがないというわけ。それで暇を持て余し、飽き飽きしてセラピイの世界に踏み込んだって。領主といっても、昔そのままでは決してないでしょうが。狩場もあるらしい。雉子を放し飼いでいるようなのよ。凡て食糧は領地内でほぼ自給自足みたい。目下お邸は大規模な改修中で、足の踏み場もないほどどこもかしこも散らかっていたから、印象は今ひとつだったけど。いずれ日本式庭園も作るとやら。事を急いでる感じでもなく、使用人たちも至ってのんびり働いていたから、いつ終わるやら。それで今のところ彼女の仮住まいというのが、邸の下手にあった水車小屋跡地に古い木造の教会を解体移築したもので、日本でいえば‘古民家’というやつね。ちょこっと朽ちかけた木彫のマリア像が玄関口にあたり。天井も柱・梁も古びたままの風情がとてもいいの。1階には居間やらダイニングルームやら十分なスペースがあり、書棚に並ぶ書物はすべて麗々しくも革張りで表装され、見映えがする。室内の置物も、ブロンズ像やら、おそらく美術的価値は

高いものでしょう、そんな選び抜かれたものが隅々に飾られてあって、モダンながらも格式の高い居住空間になっていたのには感心した。やはりカートライト家伝来の古美術・骨董好きの血筋はそこに歴然としている。螺旋の階段を上がった2階には、エリザベスの寝室の他に客用寝室が幾つかあって、その一つに私は泊まったことになる。一つ愉快だったのは、元水車小屋だったからか、建物の軒下を水が流れるように設計されていて、廊下の一部に硝子が嵌め込まれてあり、室内から水飛沫をあげて轟々と流れるさまが眺められるようになっていたの。まるで我が家の池そっくり！硝子貼りの廊下越しにちょうど真下の池に錦鯉が泳ぐ姿が見れるでしょ。お父さまの設計だけど。いい景色よね。風趣というのか、そんな同じようなこと考え付いた人がここにもいたって、感激した。懐かしかったのよ。

勿論、エリザベスは歓迎してくださったけど、もう一人泊り客の男性がいらして、どうやら彼女の遠縁の血筋の方らしかったけど。何かしら屈託があるらしく、特に話が弾むわけでもなく、晚餐にはお近くにお住まいのお母さまも加わって、なんとなく時間は過ぎてしまって。夜になると、それぞれ別々に個室に引き取り休むだけで。朝目覚めて食堂に行くと、そこには朝食の用意をしてくれる召使いの女性が二人居て、私一人テーブルに座ってサーヴされるわけ。エリザベスは自分の寝室に朝食を運ばせる習慣だから、それはそう告げられてあったから、なるほどそれが‘貴族的’とは承知するものの、ちょっと違和感があったの。二人の使用人はおそらく地元の農家のおかみさんという風情で、朝食の用意と室内の清掃のために通いで雇われているんでしょう。殊更彼女らに愛想よくお喋りするのも変だし、ひたすらちょっと澄ました感じで、にこやかにお行儀

よく振舞うしかない。つまり何ら交流はしないわけ。品位を保つというのも楽じゃない、貴族は私には似合わないと思った次第。。

帰途、ロンドン行きを汽車を待つるとき、プラットホームにエリザベスのお母さまのお姿をちらっと認めたの。でも自分の方から近付いてご挨拶するのもむしろ不躰かと思い、気が付かなかったことにしてさっさと別の車輦に乗り込んだというわけ。ロンドンまで1時間以上、彼女と顔つき合わせるのも気詰まりと敬遠したというのが本音。エリザベスは、母親とは‘犬猿の仲’だったのよと言ってたし。ご一緒しても、際立って印象に残るものは何もない、普通の方でしたし。悪い印象では勿論ないんだけど。昨夜いらした他の泊り客、無愛想な若い男性にしてもそうだけど。そもそも英国人のアリストクラト〔貴族〕というのは、面に出すか出さないかの違いはあれ、自分たちが日頃見慣れない‘珍奇なもの’を見るときには戸惑いを感じるものなの。自分たちの慣習に固守するから、なじみのないものには決してなじめないし、断固なじまないところがある。好奇心がフリーズ(凍結)するわけ。誇り高いというべきでしょうが。。私なんか‘黄色人種’なわけだし、その不慣れなもの類でしょうから。敢えてさっさと逃げてやるのがむしろ礼儀ってところ。。それで、なぜエリザベスとミアアナが仲良しなのかが謎だわ。それぞれに違うにしろ、おそらく二人ともどこか傷つきを秘めた‘孤独な魂’だからなのかも知れない。。ともかく【タヴィ】でいい‘お姉さん格’を知り合いに持てたことは感謝していいわね。

さて、もう直にお正月です。民謡やら雅楽やら吹き込んだテープを盛んに聴いてます。やっぱり凄くいい！ご機嫌よう。千鶴子より
.....